

社会科

西 勝 也
井 南 亮 佑

1 社会科における「よりよい未来を志向する子」

我が国は現在、情報化社会と言われており、様々な分野に情報化が進展している。子どもは多様な情報手段から膨大な情報を得ることができる。一方で、日本の子どもの社会への関心の低さや、社会にかかわろうとする意欲の低さは、諸外国と比べると顕著に見られる。情報に溢れた環境で生活しながらも国家や社会への関心・意欲が低いということが現状だと言える。

新学習指導要領社会科の目標は、公民としての資質・能力の基礎を育成することである。その資質・能力の具体的内容は、知識や思考力を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的にとらえて現代的な諸課題を歴史的に考察する力、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度である。資質・能力を社会的な見方・考え方を働かせながら身に付けることで、よりよい社会の形成に参画する人物を育てていける。社会科教育を充実させることで、「国家や社会に対する関心・意欲が低い」という現状を打破することができる。

本校の社会科では、選択・判断する力を身に付けることに重点をおいてきた。社会的事象を自分事にとらえ、多角的視点から選択・判断し、自己の変容に気付くという流れを大切にしている。人は何かを選択・判断する際、理由や根拠を見いだそうとする。その際、一方向からの視点ではなく、事象間の共通点や相違点を探したり一つの事象でも見方を変えたりすることで、見えなかったことが見えるようになり、自分の選択・判断をふり返ることができる。このような経験の積み重ねが、将来社会に出たときに課題を解決するための糸口になると考えている。

以上のことから、社会科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・ 社会的事象に対して問題意識をもち 自分たちのこととして解決しようとする子
- ・ 実社会で働く人や先人の姿を手がかりとし 友達とともに社会的事象について多角的な視点で選択・判断し 考察する子
- ・ 学んだことから自己の変容を自覚し 自分なりに社会とかかわっていかうとする子

2 社会科における決める授業デザイン

まず、「社会的事象に対して問題意識をもち、自分たちのこととして解決しようとする子」を育てるため「問い」を吟味している。「どのようにして～しているのか、前までは～なはずなのに、なぜ～なのか」という子どもが考えたくなる「問い」を単元を通す課題、毎時間の学習課題として設定していく。また、教材とする事象は子どもが自分の考えを根拠とともにもち、選択・判断（決める）をくり返して社会的な見方・考え方を身に付けられるものか留意している。内容的なおもしろさを求めるのではなく、子どもが公民的な資質・能力を身に付けるために適したものを選ぶ。これらにより子どもは主体的に事象とかかわっていかうとする。

次に、「実社会で働く人や先人の姿を手がかりとし、友達とともに社会的事象について多角的な視点で選択・判断し、考察する子」を育てるため、選択・判断（決める）をさせる場面を単元の中に複数回位置付けている。事象について考えさせる際には、地図や年表を用いて空間軸・時間軸を視点としてもたせる。また、学習したことを比較・分類、関連付けて考えさせる。このように社会的な見方・考え方を働かせることで深く事象と向き合っていけるようにする。事象について考えさせていく中で、選択・判断（決める）をせまる問いを教師が投げかけることで子どもは根拠を探すようになる。決めることで子どもに主体性が生まれ、学びが深いものへと変容する。子どもは友達とかかわり、共感したり、反論したりしながら学習を進めていく。同じ考えでも根拠が違っていたり、根拠が同じでも解釈が違っていたりする。異なる意見を聞くことで新たな気付きを得て、根拠となる資料を再度決めるきっかけとなる。このようにすることで自分の考えが深まっていく。友達とのかかわりによって、自分の考えの深まりを自覚し、決める根拠が更新される。また、実際に社会の形成に従事する関係諸機関の人から聞き取りを

行い、よりよい社会を形成するための工夫や努力、専門的なことや重要なことを知ることで、子どもが再度、選択・判断して決め直すための根拠が更新されていく。

最後に、「学んだことから自己の変容を自覚し、自分なりに社会とかかわっていかうとする子」を育てるために、単元中や授業中に自己の選択・判断（決める）を繰り返す機会を複数回設定する。自己の変容に気付く、自己の成長を認識できたときに、子どもは社会により主体的にかかわろうとし、社会の一員としての自覚を実感していくはずである。学習内容ばかりを繰り返るのではなく、その単元を通してどのようなことができるようになったのか、どのような社会的見方・考え方が身に付いたのかに重点をおき、繰り返らせるようにする。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

今までの生活体験や既習内容との相違点が見いだせる社会的事象に出会わせる。子どもは「前までは～なはずなのに、なぜ～なのか？」というような問いをもつ。各々の問いの交流を通して、集団の中で解決する価値のある問いへと高めていく際に、子どもは主体的な学びの中で追究していく課題を決める。子どもの認識とのズレから必要感をもって問題を解決したいと思う事象や子どもの心がゆさぶられる事象と出会わせることで追究課題を決めていく。

また、事実を調べたあとに、社会とのかかわりをもたせるために判断や意思決定を必要とする事象と出会わせたり、よりよい社会の形成に携わっている人に出会わせたりする。このような出会いを単元の中に位置付けることで、はじめは社会的事象を他人事として考えていた子どもが次第に自分事として考えるようになり、最終的には自分たち事として考えるようになっていく。選択・判断をくり返していくことで、よりよい社会をめざすための自分の立場を明確に決めていく。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

社会の形成に従事している人や友達の考えを聞くことで、自分では気付かなかったことに気付いたり、自分の考えと比較したりする。そうすることで、考えを広げ、深めていく。このような対話のある活動を意図的に取り入れる。例えば、ゲストティーチャーの話の聞いたり、地域の関係諸機関の人へ聞き取り調査をしたりする活動、ペアやグループでの話し合いや自分の考えを明確にした討論などの活動である。その際、中学年では見学や調査活動で見つけた事実、高学年では統計資料や年表、地図などを自分の予想したことや主張したいことを裏付ける根拠として示すことで、自分の考えがより明確になってくる。

また、討論する中で、社会的問題に対して自分たちにできることを考えさせたり、実社会で行われている政策についてどう考えるかを問うたりする。その際、前単元の社会的事象と再度比較することも大切である。中学年では、自分たちならどうするか、どう思うかを考えていき、高学年では「～の立場で」「～の一員として」と考えたり、どちらを優先すべきかを考えたりしながら決める。複数の選択肢に対し是非を問うのではなく、よい点、悪い点を考え、大多数が納得できる最適解を求めていくようにする。

(3) 今までの学びを振り返り 未来に役立てる「決める」

単元の最初と最後、1時間の授業でのはじめと終わりで単元を貫く課題について子どもの選択・判断した過程にどのような変容が見られたのかを板書やワークシートを用いて可視化する。その時には、事実と意見を分けて記述したり、事象と事象の関連を矢印や線で結んだりしてわかりやすくする。同じ課題について以前の自分の考えと今の自分の考えを見比べることによって、以前はわからなかったことがわかるようになっていたり、見えなかった事象が見えるようになっていたりすることを実感させる。その際に、自己の変容は何によって変わったのか、変容の根拠を明確にさせる。例えば、人の生き方を含んだ新たな事象との出会いによってなのか、自分の考えとは異なる友達の考えによってなのか、変容の根拠を明確にすることで、自己の変容をより明確に自覚することができ、深い学びを味わうことができる。このようにすることで、多様な視点から物事を選択・判断することのよさを感じさせる。

単元の終末には、これからの未来を分析・予測し、よりよい社会をめざして社会の中で自分にできることは何かを決め、これから社会とどのようにかかわっていくのかを決める。